

毎月11日は「人権を確かめあう日」です。

2020/10/08 人権教育部

○自身の留学経験において、それこそ間近に「人種」という概念を突きつけられ否応なく考えさせられた中で、しっかりと自分の内面に向き合い、問うている。「人種」という概念を差別の対象にしないために、様々な色(人種)が混じり合っただけの世界であるという理解と受容の精神を訴えているところに、私たちの世代の未来の希望を感じませんか。

私は高校2年生の夏から3年生の夏までの1年間を異国で過ごした。小さな谷にある町で、学校に私のような外見の生徒は私1人だった。生徒の割合の内訳は、いわゆる白人が4割、いわゆるヒスパニックが4割、いわゆる黒人が1割以下であった。

ある日、ある外国語の授業で自分の外見を習った言葉で説明する課題が出されて戸惑った。なぜなら、私は自分の肌の色が判らなかったからだ。私は人種の違いなどに興味がありそれなりによく理解しているつもりでいたが、自分自身の「人種」については理解していなかったようだ。家に帰ってホストファミリーに聞こうと思ったが、少し恥ずかしい気がして一度ためらった。そして勇気を出して聞いてみると、あちらも答えるのをためらっているようだった。私の中で、「黄色」と判断されるのは、何故か嫌だった。日本人は「黄色」であるために差別的な発言をされた歴史があるという認識があったからだ。そこで自分の肌の色を「黄色」と「白」の「中間」であると発表することにした。

このように、自分自身が差別された体験がなくても、歴史や他人の話がコンプレックスを植え付けてしまい、自分自身を差別してしまう例がよくあると思う。また、現代の日本や他のアジア人女性の多くが「美白」であることに強く執着している一方で、欧米の肌の白い人達は肌を焼くことをとても好んでいることに気づかされた。どんな人種でも「ないものねだり」をし隣の芝生を青く見ようとするが、それぞれが生まれ育った個体を尊重し愛することはむしろ難しいという点では同じであるようだ。美白にこだわり自分の肌の色を嫌っている私の肌を、白人の友人はうらやむ。その時にやっと自分の肌の色の美しさを知る。自分の肌の色を「中間」であると曖昧に定義した自分が少し恥ずかしくなった。

異国の生活で、差別的な扱いをされた事は一度もなかった。むしろ、差別していたのは私自身であった。他の人と違うことを恥じていた私であったと思う。また、私と違う人種の友人たちも同じように、自分たち自身の身体的特徴を尊重していないようだった。世界で、人種差別はいけないことだ、間違っていると、教育され広く知れ渡っているようだが、別の所ではまさにその肌の違いが他の人種への憧れを生んでいた。

これからの人種差別問題は、違いを受け入れることは当たり前だと前提した上で、自分たちも含め、それぞれが素晴らしさを持っていることを自覚することが必要ではないだろうか。私にできることは、他人との違いを知ると同時に、それを恐れずに受け入れる事だと思う。グローバル化する世界は、1人1人が自己と他人両方を尊重して生きていける世界であるべきである。

